

鹿児島県教育委員会 令和2年度完了報告書

1. 調査研究概要

(1) 実践した調査研究の内容

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、変化の予測が困難な時代において、学校、家庭、地域の関係者が、子供たちに新しい時代に求められる資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程を実現し、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の取組を推進することを目的に、3校を実践校として、それぞれの研究テーマに沿った調査研究を実施し、そこで得た知見をまとめ、他校においてもプロセスから共有できるような手引きの作成を目指す。

(2) 研究テーマと実践校

- ア 県立蒲生高校：学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- イ 県立大口高校：学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- ウ 県立屋久島高校：現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(3) 成果や課題等

実践校において、カリキュラム・マネジメントへの取組について協議する過程で、生徒や学校、地域の強みを把握することができ、実践校で具体的に設定していた研究テーマについて課題を焦点化し、調査研究を進めることとなった。

実践校においては、グランドデザインの作成や見直しを行うとともに、グランドデザインに基づいた各教科や科目のシラバスの見直しを行うとともに、評価方法の工夫や改善が行うことで、授業改善が進むなどの成果がみられた。

(4) 実践地域全体における状況

調査研究の2年目となった今年度は、実践校での様々な取組が進み、教員間での共通

理解やカリキュラム・マネジメントに関する意識も高まり、成果報告会も行われた。

このような中で、実践校以外でもグランドデザインの作成が進み、また、外部講師を招いて、カリキュラム・マネジメントや職員の共通理解についての研修会を行う学校がでてくるなど、様々な波及効果がみられた。しかし、実践地域全体としては、各学校や教員間でのカリキュラム・マネジメントについての意識や取組に差があることが、県教委主催の研修会参加者のアンケートから分かった。

今後は、今回作成したカリキュラム・マネジメントの手引きの活用に加えて、県下全体でカリキュラム・マネジメントを進めて行くための工夫や方法についての検討が必要である。

(実践地域における年間実施スケジュール)

月	取組内容
6月	実践校の現状確認
7月	研究実践
8月	研究実践
9月	研究実践
10月	16日：第1回カリキュラム・マネジメント検討会議 27日：蒲生高校の成果報告会
11月	13日：キャリア・デザインセミナー（カリキュラム・マネジメントに関する研修）
12月	10日：文部科学省のヒアリング 14日：大口高校の公開授業
1月	15日：第2回カリキュラム・マネジメント検討会議
2月	22日：第3回カリキュラム・マネジメント検討会議
3月	手引きの作成

2. 調査研究の内容

実践校【 鹿児島県立蒲生高等学校 】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」

(2) 調査研究の内容

令和2年度

前年度から取り組んでいるA：グランドデザインの見直しを含めた検討とB：「表現力や読解力の育成」を目指した取組を進めていくことを、年度当初の職員会議で確認。また、カリキュラ

ム・マネジメント係（検討委員会）を新設し、定例の会を持ち、計画・立案を進めていくこととした。Bについてはコロナ禍の影響から、取組の開始を6月からとした。

① 研究授業の実施

表現力や読解力の育成を目指した指導を、具体的にどのように取り組んでいけばよいか、指導例を見てみたいという声もあり、下記の要領で研究授業および授業研究を実施した。

- ・ 実施日 令和2年6月5日（水）6限目 授業研究は放課後
- ・ 実施教科など 普通科3年普通コース コミュニケーション英語Ⅲ
- ・ 授業者 英語科教諭 前原利昭

② 職員研修の実施（令和2年8月27日（木））放課後

表現力や読解力の育成を目指した各教科の取組について、成果と課題や経過報告を行った。2学期以降の取組について、各教科での検討をしていくとの確認を行った。また、カリキュラム・マネジメント検討委員会で取り組んでいるグランドデザインの見直しと検討について、現状報告を行った。また、成果報告会の原案について提案がなされた。6月に実施された1年生の「学びの基礎診断」の結果と分析についても報告がなされた。資料については「その他 参考になる資料」の蒲生高校別添資料1を参照。

③ 令和2年度鹿児島県カリキュラム・マネジメント検討会議（10月16日）

これまでの取組についての報告と今後の進め方について質疑応答。

④ 成果報告会の実施（10月27日）

以下の要領で公開授業（国語科・数学科）、研究討議（授業研究）および成果報告を行った。本校職員および外部から26名の参加があった。

※ 成果報告の内容については、資料については「その他 参考になる資料」の蒲生高校別添資料2を参照

⑤ グランドデザインの実施状況を測るためのルーブリック作成（令和3年1～2月）

カリキュラム・マネジメントの取組を来年度以降も継続していくためには、取組全体の評価の在り方についても考えていく必要が出てきた。そのため、カリマネ検討委員会でグランドデザインの実施状況を測るためのルーブリックを作成し、今後実施方法やデータの取りまとめ、活用の在り方について検討していく予定である。ルーブリックについては資料については「その他 参考になる資料」の蒲生高校別添資料3を参照。

⑥ 令和2年度鹿児島県第3回カリキュラム・マネジメント検討会議（令和3年2月22日）

県庁にて検討会議が行われ、手引き書の内容検討や今後の取組について各校から報告があった。検討委員の先生方から貴重な助言をいただくことができた。

（3） 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

○・・・成果 ●・・・課題

- カリキュラム・マネジメントやグランドデザインの捉え方・考え方を理解するために、教師自身の学びの場面として職員研修を複数回設定した。グループ討議の中で、お互いの意見や疑問点を出し合いながら、共通の認識を持つことができた。
- 先進校視察後に職員会議で、視察の報告がなされた。他県の取組について知ることができ、本校の取組を進めていくうえで、有用な情報となった。（令和元年度）
- カリキュラム・マネジメント検討委員会を設定したことで、従来の教育課程委員会と比べて、業務内容が明確となり、原案を作成しやすい環境となった。
- 授業アンケートを実施し、その結果をもとに授業の分析を改めて行うことができた。授業改善へのきっかけ作りとなった。（令和元年度）

- 県の検討会議でグランドデザインの作成を進めていく際の手順や視点について、検討委員の先生方から様々なアドバイスを受けた。校内で検討や見直しを行う際に大変参考になった。
- 「生徒に身に付けさせたい資質・能力」については「蒲生高校生に」を付け加え、より具体性を持たせ、明確化することができた。
- 「表現力や読解力の育成」については、各教科で様々な取り組みがなされており、今後も継続した取組が期待される。
- グランドデザインの検討と見直しは、今後も引き続き行っていく必要がある。達成度を測るアンケート（ループリックを作成中）の実施や、保護者や地域の方々も理解してもらえるような方策を考える必要がある。
- 教育課程への位置づけをどのように行っていくか、カリキュラム関連図やシラバスとの関係性の明確化を進める必要がある。
- 評価の在り方については、「表現力や読解力の育成」と併せて様々な視点から提案を行った。今後は教科の特性は生かしながらも、学校としての方向性を考えていく必要がある。ポートフォリオを積極的に活用したい。
- 観点別評価との関連づけについては今後検討していく必要がある。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	各教科での取組開始・研究授業および授業研究の実施
7月	各教科での取組（1学期実施分）についての振り返り
8月	職員研修の実施（各教科の取組について成果や課題の報告）
9月	
10月	成果報告会の実施
11月	
12月	
1月	次年度シラバス計画作成の依頼
2月	グランドデザインループリック案の作成
3月	報告書の提出

実践校【 鹿児島県立大口高等学校 】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

地域活性化活動への実践的取組や教科等の探究的な取組を通して、学習の基盤となる、言語能力、問題発見・解決能力、情報活用能力を育成する。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

〔成果〕

① 言語能力について

- ・ グループワークや発表の場を通し、コミュニケーション能力とともに、言葉で正確に伝えること、表現することの難しさを生徒たちが再認識でき、その能力育成に役立った。
- ・ 授業や総合的な探究の時間の取組を通して、生徒の発言する機会や発表の場を多く作るようにした。このことは、生徒の発信力や言語能力の育成につながったと思われる。また、地域活性化活動では地域の方々へのインタビューなどを通して、人前で話すことが苦手だった生徒も話すことへの自信が付いてきたのではないかな。

② 問題発見・解決能力

- ・ 地域活性化活動では、自分たちで課題テーマを自由に探させることで、自分の興味のある課題について、より問題の根源を突き止めようとする姿勢が生まれた。また、地域の問題を自分たちの問題として捉えられるようになり、解決策を真剣に考えることができた。実際に地域の専門の方々からもアドバイスをもらい、課題解決に向けて自分たちのアイデアをより現実的なものへと高めていくことができた。
- ・ グループでの意見交換や話し合いを持つことで、問題点や解決策の幅を広げることができた。生徒たちは、協働作業から物事を多面的に捉えられることを学べたのではないかな。

③ 情報活用能力について

- ・ 自分の必要とする情報をどのようにして入手するかだけではなく、その信頼性についても考え、取舍選択する必要性が生徒たちにわかってきた。
- ・ 情報を比較し、課題解決のためにはどの情報を適用させるべきかを生徒たちは学んだ。特に地域活性化の課題解決においては、既存の資料を活用するだけでなく、その問題に関わる地域の人々の意見を聞いたりアンケートを取ることなどの直接的な情報収集がより有用なこともわかってきた。

〔課題〕

① 言語能力について

- ・ 授業では、特に教師による発問の仕方が生徒の発信力の育成に関わってくる。教師の発問の方法や生徒の発信の場をどのように作っていくかなどの工夫が必要である。

② 問題発見・解決能力

- ・ 授業においては、授業の進度との関係から、生徒に考えさせる時間を十分に取れなかった。特に、問題発見・解決能力を育てるには、授業での時間配分の工夫が必要である。

③ 情報活用能力について

- ・ 生徒によっては、必要な情報取得や問題解決の手法について、安易にインターネットの情報に頼りすぎる者もいる。解決策を自身で考え模索するよりネット上で解答を探そうとする傾向のある生徒について、情報を活用しながら自身で問題に対する解決

能力や判断する力をどう付けさせていくかが課題である。

- ・ ICTの活用については、生徒間でも教師間でもその活用能力の差が大きい。職員へのさらなるICT活用に関する研修が必要である。

[その他]

- ① 調査研究の内容の能力について、各教科の授業で具体的にどのように評価していくことができるか。
- ② 学校で取り組んだ資質・能力の育成を、生徒が日常で継続的に伸ばさせていくことが大切である。
- ③ 「総合的な探究の時間」の取組に関する生徒アンケート集計結果より
年間を通じた取組で生徒たちは、本校のグランドデザインにある「育てたい生徒の資質・能力」の項目で、「適切に判断する力」「協働力」「チャレンジし、やり抜く力」の項目において、それぞれに約95%の生徒が、力が付いた〔(かなり身に付いた)と(少しは身に付いた)の合計〕と回答している。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	(1) 改訂版シラバスの作成(追加分) (2) 全科目がグランドデザインに沿った項目を追加
7月	各教科で実践
8月	
9月	第2回カリキュラム・マネジメント検討委員会(・各教科の取組状況について ・教科からの中間報告書の提出)
10月	各教科で実践
11月	第3回カリキュラム・マネジメント検討委員会(・各教科の取組状況について ・評価と研究発表について)
12月	(1) 総合的な探究の時間「地域活性化活動」中間発表会 (2) カリキュラム・マネジメントに関する公開研究授業
1月	第4回カリキュラム・マネジメント検討委員会 (・各教科の年間を通じた取組について、 ・職員へのアンケート調査)
2月	第5回カリキュラム・マネジメント検討委員会 (・生徒による自己評価の実施と分析 ・研究テーマのまとめ)
3月	(1) 総合的な探究の時間「地域活性化活動」最終発表会 (2) 第6回カリキュラム・マネジメント検討委員会(振り返りと来年度へ向けて)

実践校【 鹿児島県立屋久島高等学校 】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

(2) 調査研究の内容

現代的な諸課題（特に環境問題について）に対応するための資質・能力の育成に向け、特徴的な郷土研究への多面的な取組を進めてきた県内唯一の本校普通科環境コースの取組を、普通科の「総合的な探究の時間」や情報ビジネス科の「課題研究」などにも波及し、屋久島ならではの学びを進めるべく全体的な体制でカリキュラム・マネジメントを研究する。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

普通科の「総合的な探究の時間」で探究活動を実践する際、研究を効果的に進める手法等について環境コースの取組を参考にした。その結果、個々の進路に対応した研究を行うことで、進路目標を明確にすることができたり、課題発見から解決への道筋を学んだりすることで、自ら積極的に取り組む姿勢が見られた。

情報ビジネス科の「課題研究」で地域企業と連携した課題に取り組む際、環境コースが連携している研究機関から指導助言をいただいた。その結果、課題を明確にし、高校生が取り組めることを考え実践したことで、地域の変化を体感し、ビジネスの役割について学ぶことができた。

昨年度からの調査研究の結果、学校全体を通して育成を目指す資質・能力が明確でないことが課題として見えてきた。そこで、今年度、カリキュラム・マネジメントを通して育成を目指す資質・能力を明確にするために、カリキュラム・マネジメント推進委員会を中心に検討し、あわせてグランドデザインの改良や教育活動におけるPDCAサイクルの見直し、ルーブリック評価表の作成、検討を行った。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
6月	情報ビジネス科も参加して普通科「総合的な探究の時間」の成果発表会を開催
7月	普通科環境コース宿泊研修
8月	全国高校生自然環境サミットを連携機関と共催
9月	
10月	第1回カリキュラム・マネジメント検討会議
11月	カリキュラム・マネジメント推進委員会（検討会議のフィードバック等）
12月	カリキュラム・マネジメント推進委員会（評価法等の研究）
1月	職員会議（学校全体で育成を目指す資質・能力の提案）
2月	カリキュラム・マネジメント推進委員会（グランドデザイン改良、評価表等）
3月	報告書の提出

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

- 各実践校において、育成を目指す資質・能力についての議論がなされるとともに、シラバスの見直しや評価の工夫が行われるなどの取組が行われた。
- 県教育委員会主催の研修では、カリキュラム・マネジメントについての研修を行った昨年度の高次接続改革セミナーに引き続き、今年度は、キャリア・デザインセミナーにおいて、資質・能力の育成に向けた取組についての研修を行った。参加者のカリキュラム・マネジメントへの意識は高まった。
- 実践校以外の学校でも、外部講師を招いて、カリキュラム・マネジメントや職員の共通理解についての研修を行う学校が出てきた。
- 実践校において、カリキュラム・マネジメントは面白いという雰囲気が出てきている。
- カリキュラム・マネジメントへの取組が、必然的に授業改善につながっている。
- 教員のICTの活用についても積極的になってきている。
- 教科横断的な取組に興味をもつ教員が増えてきた。
- 研究授業の指導案においても、育成を目指す資質・能力を意識したものが増えてきた。
- 育成を目指す・資質・能力について、教員と生徒が共有できるように、黒板等に掲示するアイコンの作成に取り組んだ実践校があった。
- 県教育委員会主催の研修、キャリア・デザインセミナーの参加者のアンケートから、カリキュラム・マネジメントについての意識や知識において教員間の差があることが分かった。今後は、実践校以外の学校での取組をどのように進めて行くかが課題である。今回作成した手引きを各高校に配付するとともに、来年度の県教育委員会主催の研修、キャリア・デザインセミナーや教育課程説明会において、積極的に情報発信し、県全体での取組が進むように工夫していく計画である。

また、本県は各県立高校から「高校生のための学びの基礎診断」に係るPDCAサイクルの取組計画等や、「総合的な探究の時間」の全体計画等について提出してもらっているが、それらの確認や活用をこれまで以上に行うことで、各高校のカリキュラム・マネジメントの推進を支えていく。
- グランドデザインの作成については、指導計画だけでなく、グランドデザインの達成度の評価まで含めて意識して取り組むべきであるが、ルーブリックを用いたグランドデザインの達成度評価については、検討中の実践校もあった。
- ICTの活用能力について、職員、生徒ともに差がある。ICTの研修の充実が必要である。
- 教科横断的な指導について、時間割の調整等を含めて課題が残った実践校があった。

教科横断的な学習については、今年度から県の事業として「未来を切り拓く!県立高校資質・能力育成支援事業」の中でも研究を行っている。来年度は、その取組を更に進めるとともに、積極的な情報発信を行うことで、各学校での実践が広がるようにしたい。
- 新型コロナウイルス感染症対策のため、公開授業の規模を縮小せざるを得ない状況があった。コロナ禍の中での情報共有をどのように行っていくかの検討が必要である。